



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	外国語学習環境における日本語学習者の動機づけ : メキシコの学習者を対象とした分析から [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	佐藤, 梓
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第13629号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74404
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Azusa_Sato_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：佐藤 梓

学位論文題名

外国語学習環境における日本語学習者の動機づけ
—メキシコの学習者を対象とした分析から—

本研究は、「外国語環境」で選択科目として大学で日本語を学ぶ学習者の学習動機づけについてメキシコでの調査に基づき明らかにしたものである。対象者は、自らの意志で日本語を学ぶことを選択していることが多く、日本語学習に積極的な姿勢が見受けられるが、このような実益に結びつきにくい学習環境で自らの関心から学ぶ学習者の日本語学習動機づけについては、それほど明らかにされてこなかった。

第1章は全体の枠組みを示した序論である。第2章では、外国語学習環境の特徴やメキシコの日本語教育の背景、日本語学習環境、学習者の特徴を述べた。メキシコの日本語教育の特徴は、初等・高等教育や高等教育機関で日本語を専攻として学ぶ学習者はごく限られた教育機関に所属している学習者であり、そのほとんどが高等教育機関やその他の機関で学ぶ成人層であることである。海外の日本語教育においては、実益のためではなく、知識を獲得することだけを目的としない学習がある可能性が考えられる。メキシコでの日本語学習の目的や理由に日系企業の進出を関連させる考え方があるが、それには一考の余地がある。

第3章では、これまでに行われてきた動機づけ全般について概観した上で、学習に関わる動機づけ、外国語学習や日本語学習に関する動機づけ研究について述べ、本論文の理論的な枠組みを示した。これまでの日本語教育研究においては、第二言語習得研究における「統合的動機づけ」「道具的動機づけ」の分類で動機づけを分析することが多かったが、本研究での対象者は自らの関心から日本語を学んでいることが想定されるため、教育心理学における「内発的－外発的動機づけ」の枠組みを採用することとした。さらに、この枠組みをより詳しく理解することが可能な「学習動機づけの2要因モデル（市川1998）」を理論的モデルとして採用した。

第4章では、研究目的、課題および研究方法を示した。メキシコの学習者は自らの意志で日本語を学んでいるが、海外でのそのような成人学習者の内発的動機づけについてはあまり検討されていない。また、日系企業の進出が日本語学習動機に関わるかも検討の余地がある。そこで、次の4点を研究課題とした。すなわち、1) メキシコの日本語学習者の学習動機づけとはどのようなものか。2) メキシコの学習者の学習動機には日系企業の進出との関連が指摘されることがあるが、日系企業

の進出状況の異なる地域において、学習者の動機づけは異なるのか。3)「興味」は学習に肯定的に作用するといわれるが、メキシコの学習者の「日本語に対する興味」とはどのようなものか。4) 内発的動機づけの一つである「知的好奇心」や「興味」は学習歴や地域により異なるのか。である。

第5章(研究1)では、メキシコの日本語学習者の動機づけを明らかにするため、メキシコの4地域で行った調査結果により動機づけ構造の検討を行った。日本語学習者の動機づけを「学習動機づけの2要因モデル」により因子構造を分析したところ、メキシコの日本語学習者の動機づけは、「日本語使用に対する自尊感情」「知識技能の獲得」「他言語と他者のため」「学習の有用性」「知的訓練と学ぶことの面白さ」の5因子構造であることが明らかになった。因子として抽出された「知識技能の獲得」と「他言語や他者のため」の評定平均値は低く、学習者は、日本語学習において新しい知識を得ることや日本語が分かるようになることを目指しているのではなく、学ぶということ自体をおもしろいと感じている可能性があり、日本語を勉強して自分の知的能力をのばすという知的訓練に価値を見出していると考えられる。また、学んだ言語知識や日本語を学習することで得られるものを具体的に役立たせることをあまり想定していないが、将来の仕事や経済的な将来性と日本語学習や日本語ができることに期待をもっていることが示唆された。くわえて、メキシコの学習者は他者との比較や他者を喜ばせるために動機づけられているのではなく、あくまでも学習者自身のために学んでいることが窺えた。

第6章(研究2)では、ある1地域におけるメキシコの学習者の日本語そのものへの興味について質的な分析を行った。学習者を学習歴で分け、学習歴による異なりについても検討した。結果として、「日本語そのものへの興味」の記述内容に対する具体性については、学習歴が長いほうがよりその記述内容が具体的で精緻化される傾向にあり、また、学習歴が長い学習者には「使用」に関連した言及も見られた。また、学習者には困難に挑戦する志向も見られた。一般的に、学習対象への難しさや複雑さは学習動機づけにマイナスに働き、避けられるべきものとして捉えられがちであるが、メキシコの学習者においては複雑さや難しさが日本語学習への動機づけにプラスに作用する可能性が示された。

第7章(研究3)では、日系企業の進出傾向が異なる4地域で行った「日本語そのものへの興味」、「挑戦的志向」、「知的好奇心」について量的な分析を行うことで、研究2で明らかにしたメキシコの日本語学習者の「興味」をある程度一般化できるかを検討した。また、学習歴や学習している地域によって、それらに異なりがあるかも合わせて検討した。研究2で得られた多くの項目において高い評定値が得られ、研究2の分析から得られた「日本語そのものへの興味」がメキシコの4地域の日本語学習者の興味と共通することが示された。漢字を含む文字の読み書き、漢字の複雑性、適切な敬語の使用、日本語の音への興味、スペイン語との違いなどが、メキシコの日本語学習者の持つ「日本語そのものへの興味」の具体的な内容であり、学習歴の長さにより漢字使用や漢字のもつ特徴への興味に違いがあることが示唆された。日系企業が進出しておらず日本人との接触機会が少ない地域において日本語の複雑さに対しより強く興味が向けられており、接触・使用機会がないことがむし

る興味を喚起している可能性がある。また、「母語と異なること」や「難しい言語である」ということが日本語学習の動機づけとして機能する可能性が示唆された。

以上、研究1から3の内容から、今回対象としたメキシコの日本語学習者は、新しい知識や技能を得ることよりも、日本語を学ぶことを通して自分の知的能力をのばすことやその学習から得られる新たな視点などを重要視していると言える。そのため、海外で自ら選択して日本語を学ぶ学習者に対しては、進歩や熟達を志向しない学習者がいることや言語を手段として使うことを第一目的としない学習者がいるということを教師が把握し、日本語の知識獲得や技能向上のみで学習者を評価しないことが肝要であると言える。また、海外の日本語学習の要因として日系企業の進出の影響が指摘されることが多いが、本研究の結果からは、日系企業の進出と日本語学習動機づけの関連はあまりないと考えられる。

本研究では、学習者の動機づけがどのように変化し、学び続けているのかについては触れることはできなかった。今後は、メキシコのみならず他地域とも比較しながら、自ら選択して日本語を学ぶ学習者の学習動機づけを明らかにしていき、海外で日本語教育を行う意義を検討していきたい。

(以上)